『百丈廣録』覺書

坂内榮夫

百丈懐海禪師（七四九～八一四）、唐代の禪僧である。出身は太原の王氏、福州長樂縣（福建省福州長樂縣）の人である。洪州の百丈山[1]（江西省南昌市）に道場を構えた事により、世に百丈懐海と稱される。懐海は、法系から言うと洪州禪の創始者馬祖道一（七〇九～七八八）の直弟子であり、黄檗希運の師に當たる禪僧である。彼の傳記については[2]、『宋高僧傳』巻十「唐新呉百丈山懐海傳」[3]に本傳が載せられており、『祖堂集』巻十四「百丈和尚章」・『景德傳燈録』巻六「洪州百丈山懐海禪師章」などの燈史にも少し觸れられている。しかし、同時代人の陳詡[4]の手による「百丈大智禪師塔銘」[5]が、『全唐文』巻四四六などに收められており、一番信頼できる資料という事ができる。「百丈大智禪師塔銘」は、懐海について次のように述べている。

桑門の上首、懐海禪師と曰ひ、斯に室し斯に塔し、大法を斯に付す。其の門弟子　陵谷の遷貿し、日時紀を失ふを懼れ、儒者に託して銘して以って之を表はす。西方の教　中國に行はれ、彼の六度を以って我の五常を視れば、惡を遏め善に遷るは、途を殊にするも轍を同じくするなり。唯だ禪那一宗のみ生死を度越し、大智慧者　方に之を得て、雞足を經て自り曹溪に達するまでは、紀牒に詳かなり。曹溪は衡嶽觀音臺懐讓和上に傳へ、觀音は江西道一和上に傳へ、〈闕二字〉詔して諡を大寂禪師と爲す。大寂は大師に傳へ、中土に相承すること、凡そ九代なり。大師は太原の王氏、福州長樂縣の人。遠祖永嘉の喪亂を以って、閩隅に徙る。大師は大事因縁を以って、像季に生まる。……西山慧照和尚に落髪し、具を衡山法朝律師に進めらる。既にして歎じて曰く、將に妄源を滌ひ必ず法海に遊ばんとするに、豈に惟だ心證のみならんや、亦た言詮を假らん。遂に廬江に詣り、浮槎の經藏を閲し、庭宇を窺はざること積年たり。既に大寂を師とし、盡く心印を得たり。言は簡なるも理は精しく、貌は和やかなるも神は峻し。睹れば即ち敬を生じ、居常は自ら卑く、善く名に近づかず。故に先師の碑文は、獨り其の稱號を晦ませり。……唯だ大師は幽隱に躭るを好み、雲松に棲止す。名を遺つるも德稱は益ます高く、獨り往くも學徒は彌いよ盛んなり。其の徧く講肆を探り、禪關を歴抵すること有るも、滯著の未だ祛はれず、空有に猶ほ閡まるものあれば、萬里に緘藏するもの　決を一言に取り、疑網の雲張するもの　智刃の氷斷せざる靡し。是れ由り齊魯燕代、荊呉閩蜀、影を望みて星のごとく奔り、聲を聆きて飈のごとく至る。其の飢渴に當たりては、快く安穩を得て、懸解に超然たること、時に其の人有り。大師　初めは石門に居り、大寂の塔に依る。次に師位に補せられ、重ねて上法を宣ぶ。後に衆の歸集する所にして、意は遐深に在るを以って、百丈山に碣を一隅を立つ。人烟は四絶し、將に築をトせんと欲すれば、必ず檀那を俟つ。伊補塞の游暢と甘貞、家山を施すことを請ひ、鄉導と爲るを願ふ。庵廬に環遶し、供施は芿積し、衆は又た石門を踰えたり。然るに地は靈にして境は遠きを以って、頗る終焉の志有り。元和九年正月十七日、證して禪床に滅せり、報齡六十六、僧臘四十七。其の年四月廿二日を以って。全身を奉じて

西峰に窆す。婆娑論の文に據り、淨行婆羅門葬法を用ふ、遺旨に遵ふなり。

百丈は、馬祖に教えを受けてその心印を得ることができた。馬祖の死後しばらくは、師の塔がある石門山[6]（江西省南昌市）に留まっていた。そこで子弟を教化していたが、迷いを斷ち切ってくれるとの名聲が高まり、教えを請いにやって來る修行者が數多く訪れるようになった。そこで、後に在家信者の游暢と甘貞の喜捨によって、人里離れた百丈山に道場を構え、その地で弟子の教化に努めた。弟子達が各地から大いに雲集した様は、以前に石門山にいた時よりも賑わったという。そして、その地で元和九年（八一四）正月十七日に遷化したのである。六十六歳であった。[7]

そして、百丈懷海に所謂る『語録』のあった事は、「百丈大智禪師塔銘」に續いて次のようにある事から明らかである。

門人の法正等　嘗に稟奉する所、皆な調柔を得て、遞いに相い發揮し、付屬を墜とさず、他年に紹續し、自ら流布に當たる。門人の談敍　永く師恩を懷ひ、光いに塔宇を崇び、土を封り石を累ね、力めて心瘁を竭す。門人の神行と梵雲　微言を結集して語本を纂成す。凡そ今の學者は門閾を踐まず、奉じて以って師法と爲す。初め閩越の靈藹律師　一川の教宗にして三學歸仰す。嘗て佛性の有無・嚮風を以って發問し、大師　書を寓せて以って之を釋す。今　語本と與に後學に竝流す。翊　江西府に從事たりて、備に大師の法を嘗く。故に衆多の託を讓らず。

多くの門人達がそれぞれ百丈の教えを守り續ける中、神行と梵雲が百丈懷海の「微言を結集して語本を纂成した」というのである。「語本」とはどのような書物を意味するか具體的には不明であるが、弟子が師との問答説法を記録した一種の『語録』のようなものであった事は間違いなかろう。[8]この「語本」[9]が靈藹律師に送った書簡と共に世間に流布していたと言うのである。そして、最後に作者の陳翊が、自分と百丈の關わりについて述べている。陳翊は、恐らく裴堪が[10]江西觀察使であった時期（八一二～一八？）に彼の幕下に籍をおき、その時に百丈から親しく教えを受けていたのである。そして、その縁から百丈の死後、弟子達からの懇請を斷る事ができず、この塔銘を書いたと述べているのである。

現在、百丈懷海の問答や説法を記録した『語録』類を、歴代書目に探して見ると、以下のように著録されている。

・『崇文總目』釋書類　中　『百文（丈？）廣語』　一卷　釋懷和撰[11]
・『通志』卷六十七　藝文略五　『百丈廣語』　一卷　僧懷和注
・『宋史』卷二百五　藝文志四　釋氏類　『懷和百丈廣語』　一卷
・『遂初堂書目』釋家類　『馬祖四家録』
・『文淵閣書目』卷十七　佛書　『馬祖四家録』　一部一册

また、圓珍（八一五～八九二）の手により將來された書物の目録の中にも、百丈の名を冠する文獻が見えている。

・『福州温州台州求得經律論疏記外書等目録』　「百丈山和尚要決」一卷（神海集　隨身）
・『日本比丘圓珍入唐求法目録』卷一　「百丈山和尚要決」　一卷
・『智證大師請來目録』　「百丈山和尚要決」　一卷

以上の事から見るに、唐代には既に百丈の問答や説法が紙に書き付けられた形となり、世間に流布していた事が推測できる。ただ、「廣語」「要決」と言うもいずれも一卷であることから、それほど大量に百丈の問答や説法が傳わっていたわけではないと思われる。殘念な事に、これら「廣語」や「要決」は今に傳わっていない。現在、百丈懷海の問答類は『語録』として二卷に纏められている。『祖堂集』や『景德傳燈録』等の燈史類にも收められている問答類が第一卷に收められ、第二卷にはやや長い問答や説法が『廣録』（以下『百丈廣録』と稱する）と名づけられて纏められている。百丈の『語録』が收められている禪籍の主なものは以下の通りである。

・『天聖廣燈録』卷八・九　「洪州百丈山大智禪師」

・『古尊宿語録』巻一・二　「百丈懐海大智禪師」
・『四家語録』巻二・三　「洪州百丈山大智禪師語録」

これらの禪籍について簡單に説明を加える事にしたい。[12] 先ず、『天聖廣燈録』は『景德傳燈録』の後を受けて「景祐三年」（一〇三六）年に完成して獻上された禪宗史書で、李遵勗の編である。南嶽下の禪者について詳述し、特に馬祖以下の祖師の語録を全て收録している點に特徴がある。次に『古尊宿語録』は、まず南宋始めに唐宋の禪僧の語録を集めた『古尊宿語要』が編纂された。この本は南宋末に杭州で增補された上で再刊され、『古尊宿語録』と名づけられた。それを更に明初になって『永樂南藏』に入藏するに伴って再增補したものが四十八卷三十五家からなる現行本『古尊宿語録』である。『百丈廣録』はこの明初の再增補の時に加えられたものである。最後に、『四家語録』とは、馬祖・百丈・黄檗・臨濟の四人の語録を集めたもので、『馬祖四家録』とも言う。この書の最初の編纂は、宋初に黄龍派の手によるものと考えられている。

次に、上記の三種類の書籍のうち、筆者が使用したテキスト[13]について説明を加える。

・開元寺版『天聖廣燈録』　「開元寺版」とは江南地域で出版された所謂る江南諸藏の一つであり、「毘盧大藏」とも言う。日本に傳わる宋版大藏經は、全てこの江南系統である。「開元寺版」は福州で開版されたものであるが、同じ福州でこの「開元寺版」が出版される直前に同系統の「東禪寺版」（「崇寧萬壽大藏」とも言う。）大藏經が完成しており、わが國にも傳わっている。この「東禪寺版」が江南系統としては最古の版である。ただ、この「東禪寺版」は現在見る事が容易でないため、今回は容易に參照できる柳田聖山編『禪學叢書五　天聖廣燈録』（中文出版社刊）によった。

・金藏廣勝寺版『天聖廣燈録』　「金藏廣勝寺版」は、女眞族が立てた金王朝で出版された大藏經である。北宋始めに太祖趙匡胤が雕造を命じた、所謂る蜀版『開寶藏』の復刻である。大定十八（一一七八）年に完成した。近年『中華大藏經（漢文部分）』（中華書局刊）として影印出版され、容易に見る事ができるようになった。ただし、テキスト的には所謂る地方版であり、高麗再雕本のように諸本を用いて校勘を行っているわけではないので、さほど精善ではないとされている。

・卍續藏經『古尊宿語録』　「卍續藏經」は、明治時代に京都の藏經書院で出版された一切經（「卍藏經」）が中國撰述の經典を割愛したのを補うため、「卍藏經」完成後に中國撰述の章疏や禪籍を集めて出版したものである。中國禪籍を收める一大叢書となっている。

・『永樂大典』版『古尊宿語録』　『永樂大典』卷一萬一千九百四には『古尊宿語録』から抄出された『百丈廣録』が收められている。これは當然の如く抄本であるが、『永樂大典』の完成は永樂六年（一四〇八）であり、『古尊宿語録』が收められた『永樂南藏』の完成した永樂十二年（一四一四）よりも時期が前である點が注目に値する。

・元版『四家語録』　『四家語録』の中で最古のテキストである元版『四家語録』は、現在南京圖書館に收藏されている。近年、柳田聖山・椎名宏雄編『禪學典籍叢刊　別卷』（臨川書店刊）の中に收められたため、容易に閲覽する事が可能となった。ただ、解題に指摘するように『百丈廣録』部分にあたる上卷第三十九・四十葉の二葉が欠落している。

・慶安版『四家語録』　明版『四家語録』を日本で復刻版したもの。テキストとしては後代の增補が多いものである。慶安元年（一六四八）刊。他本に見られない楊傑の序文を載せている事が注目に値する。柳田聖山編『禪學叢書三　四家語録・五家語録』（中文出版社）に收められている。

以上の様な種類のテキストの存在している『百丈廣録』であるが、現在に傳わっている『百丈廣録』は、北宋始めの法眼の弟子に當たる百丈山道常禪師（？～九九一）[14] の手によって重編されているようである。その

事について、覺範慧洪（一〇七一～一一二八）「題百丈常禪師所編大智廣録」（『石門文字禪』巻二十五）に、次のように述べている。[15]

余　常て老僧知瓊を司命山下に識る。瓊は湓城の人なり、黄龍　恙が無き時の客なり。余の爲に黄龍住山の作止を言ふこと甚だ詳し。嘗て手づから此録を積翠に校し、門弟子に謂ひて曰く、佛語心宗の法門、趣は江西に至りて大備と爲り、大智は精妙穎悟の力ありて、能く其の安んずる所に到る。此の中に地の以て言語に棲むべき無しと雖も、然れども要らず以って終に語言を去るべからざるなり。故に其の廣演の語、大いに禪者の法執を剔けり。而して今の五家の宗趣、皆な此れ森列すること井の海に在るが如きを録し、其の清涼甘滑、泄苦濁毒の同じからざる所あり。而るに本は則ち質を異にすること無しと。予　其の言を誌すこと之を久しくし、偶たま洞山の藏の角に函を破るものあるを見れば、中に故經多し。往きて之を掀（欣？）び撹れば、乃ち常禪師の百丈に居して、日び重編せ見るる者を獲たり。熟讀して瓊の言を驗すれば信然たり。世に傳ふる所を校すれば訛略多く、因りて之を藏して以って諸傳の失を正し、又た瓊の首告を誌すなり。

難解で文意のよく取れないところも存在するが、慧洪は洞山の經藏で道常禪師が百丈山で「日び重編し」た『百丈廣録』を手に入れる事ができた。そして、この語録を熟讀したところ、かつて知りあった知瓊禪師の言葉が眞であった事が分かった。そして、このテキストで現在世に傳わる『百丈語録』のテキストを校勘してみると通行本には誤りが多いため、通行本の錯誤を正すためにこのテキストを手元に所藏しておき、知瓊の言葉を記しておく事にしたというのである。恐らく、道常の手が加わったという『百丈廣録』が、現在傳わる『百丈廣録』の元となったものであろう。なお、前述の宇井伯壽氏が『第二禪宗史研究』「百丈懷海」章の中で、『百丈廣録』に『傳燈録』等に收められている「大乘頓悟法門」や、『宗鏡録』・『林間録』等に引用されている『百丈廣録』との異同を注記し『百丈大智禪師廣語』と名づけて收めている。現在のところ『百丈廣録』の輯成と言うべきであろう。

最後に、現行の『百丈廣録』で注意すべき事を述べると、『廣燈録』や『四家語録』版の『百丈廣録』と『古尊宿語録』版の『百丈廣録』とではテキストに一箇所だけ大きな異同が存在する。『古尊宿語録』版『百丈廣録』では、「亦名解脱深坑、可畏之處。菩薩悉皆遠離。」と「亦云失脚、作轉輪王、令四天下人一日行十善、此福智猶不能算。」の間に、次の一段が省略されているのである。

夫讀經看教語言、皆須宛轉歸就自己。但是一切言教、秖明如今鑒覺性自己、但不被一切有無諸境轉、是汝導師。能照破一切有無諸境、是金剛慧。即有自由獨立分。若不能任磨會得、縱然誦得十二圍陀經、秖成箇增上慢、却是謗佛、不是修行。但離一切聲色、亦不住於離、亦不住於知解、是修行。讀經看教、若準世間、是好事。若向明理人邊數、此是壅塞人。十地之人脱不去、流入生死河。但是三乘教、皆治貪瞋等病、秖如今念念若有貪瞋等病、先須治之、不用求覓知解語義句。知解屬貪、貪却變成病。秖如今但離一切有無諸法、亦離於離、透過三句外、自然與佛無差。既自是佛、何慮佛不解語。秖恐不是佛、被有無諸法縛、不得自由。是以理未立、先有福智、被福智載、如賤使貴。不如於理先立、後有福智。若要福智、臨時作得、撮金成土、撮土爲金、變海水爲酥酪、碎須彌山爲微塵、攝四大海水入一毛孔、於一義作無量義、於無量義作一義。

しかし、この省略された一段は、現行の『祖堂集』や『傳燈録』には「大乘頓悟法門」の一節として收められている。

そのほかに、百丈の語録に關しては、『宗鏡録』などの他の古い禪籍に斷片的な引用が見られる。宇井伯壽氏が『百丈廣語』で既に注記している佚文であるが、參考のためここに附載する。[16]

○『宗鏡録』巻十五　「百丈廣語云。應物隨形。變現諸趣。離我我所。猶屬小用。是佛事門收。大用者。大身隱於無形。大音匿於希聲。」

○『宗鏡録』巻十九　「如百丈和尚云。只如今語言。鑒照分明。覓其形相不可得。是密語。」

○『宗鏡録』巻十九　「百丈和尚云。但是一切照用。任聽縱横。啼笑語言。皆成佛慧。」

○『宗鏡録』巻七十八　「又如有學人問百丈和尚云。對一切境。如何得心如木石。答。一切諸法。本不自言是非垢淨。亦無心繫縛人。但人自虛妄計著。作。若干種解。起。若干種見。生若干種畏愛。但了諸法不自生。皆從。自己顛倒取相而有。知心與境。本不相到。當處解脱。一一諸法。一一諸心。當處寂滅。當處是道場。又本有之性。不可名目。本來不是凡。不是聖。不是愚。不是智。不是垢。不是淨。亦非空有善惡。與諸染法相應。名衆生界。與諸淨法相應。名人天二乘。若垢淨心盡。不住繫縛解脱。無一切有爲無爲縛脱等心量。處於生死。其心自在。畢竟不與諸虛幻塵勞蘊界生死。諸入和合。迥然無住。一切不拘。去來無礙。往來生死。如門開相似。」

○『宗鏡録』巻九十八　「百丈慧海和尚。因撥火示溈山靈祐。因茲頓悟。百丈乃謂曰。此暫時岐路。經云。欲見佛性。當觀因縁時節。時節既至。如迷忽悟。似忘忽憶。方省舊道己物不從他得。是故祖師云。悟了同未悟。無心得無法。秖是無虛妄凡聖等心。本來心法。元自備足。是汝今既爾。善自護持。

又廣語問云。見不。答。見。又問。見復如何。答。見無二。既云無二不以見見於見。若見更見。爲前見是。爲後見是。經云。見見之時。見非是見。所以云。不行見法。不行聞法。不行覺法。諸佛疾與授記。

又云。自心是佛。照用屬菩薩。自心是主宰。照用屬客。如波説水。照萬有以顯功。若能寂照。不存。玄旨。自然貫於今古。如云神無照功。至功常存。

又云。如今欲得驀直悟解。但人法俱泯。俱絶。俱空。」

○『萬善同歸集』巻一　「百丈和尚云。行道禮拜。慈悲喜捨。是沙門本事。宛然依佛敕。秖是不許執著。法華懺云。有二種修。一事中修。若禮念行道。悉皆一心。無分散意。二理中修。所作之心。心性不二。觀見一切悉皆是心。不得心相。」

○『林間録』巻上　「大智禪師曰。夫教語皆三句相連。初中後善。初直須教渠發善心。中破善。後始明善。菩薩即非菩薩。是名菩薩。法非法非非法。總與麼也。若即説一句。答令人入地獄。若三句一時説。渠自入地獄。不干教主事。」

○『林間録』巻下　「大智禪師曰。此事不是一切名目。何以不是實語答耶。曰若爲雕琢得虛空。爲佛相貌。若爲説道虛空是青黄赤白。如維摩云。法無有比。無可喩故。故法身無爲。不墮諸數。故曰聖體無名。不可説。如實理空門難湊。喩如大末蟲。處處能泊。唯不能泊於火焰之上。衆生亦爾。處處能縁。不能縁於般若之上。毎見學者。多悞領其意。謂衆生於般若。不能參求耳非也。此法非情識所到。故三祖大師曰。非思量處。識情難測。」

注釋

（1）　百丈山は大雄山とも呼ばれたようで、『太平寰宇記』巻一〇六「江南西道」「洪州」「奉新縣」には

大雄山〈一名百丈山〉、山有呉猛修道之處。此山雄傑葱秀、不與群山隣、因

以名之。在縣西二百十里。

と見えている。そのため、『天聖廣燈録』巻九では「洪州大雄山百丈懐海禪師」と章題を立て、「大雄山」と稱している。また、百丈山には懐海が建てた百丈寺なる寺も存在していたようである。『大清一統志』巻三〇九「南昌府」「寺觀」には次のように見えている。

百丈寺　在奉新縣西百丈山、唐僧大智建、爲鄉導庵。宣宗敕建大智壽聖禪寺、柳公權書碑。

（2）百丈の傳記に關しては、夙に宇井伯壽氏が『第二禪宗史研究』の中で、陳詡の「塔銘」や『宋高僧傳』「百丈山懐海傳」『祖堂集』『景德傳燈録』などを利用して詳細に考證されている。よって、ここでは簡略に述べるに止める。

（3）『宋高僧傳』巻十「唐新呉百丈山懐海傳」の全文は以下の通りである。

釋懐海。閩人也。少離朽宅。長遊頓門。稟自天然。不由激勸。聞大寂始化南康。操心依附。虚往實歸。果成宗匠。後檀信請居新呉界。有山峻極可千尺許。號百丈歟。海既居之。禪客無遠不至。堂室隘矣。且曰。吾行大乘法。豈宜以諸部阿笈摩教爲隨行邪。或曰。瑜伽論瓔珞經。是大乘戒律。胡不依隨乎。海曰。吾於大小乘中。博約折中。設規務歸於善焉。乃創意不循律制。別立禪居。初自達磨傳法。至六祖已來。得道眼者號長老。同西域道高臘長者。呼須菩提也。然多居律寺中。唯別院異耳。又令不論高下。盡入僧堂。堂中設長連床。施椸架挂搭道具。臥必斜枕床脣。謂之帶刀睡。爲其坐禪既久。略偃亞而已。朝參夕聚。飲食隨宜。示節儉也。行普請法。示上下均力也。長老居方丈。同維摩之一室也。不立佛殿。唯樹法堂。表法超言象也。其諸制度與毘尼師一倍相翻。天下禪宗。如風偃草。禪門獨行。由海之始也。以元和九年甲午歳正月十七日歸寂。享年九十五矣。穆宗長慶元年。敕諡大智禪師。塔曰大寶勝輪焉。（T五〇—七七〇C）

（4）塔銘の撰者陳詡の傳記について、詳細は不明である。ただ、『新唐書』巻六十「藝文志」四「集部別集類」に陳詡の文集を著録しており、そこでは次のように百丈と同鄉であった事が述べられている。

陳詡集　十卷　〈字載物、福州閩縣人。貞元戸部郎中、知制誥。〉

また、『淳熙三山志』巻二十六「人物類一」「科名」では

貞元十三年　丁丑　鄭巨源牓　〈陳詡　字載物、閩縣人。終戸部員外郎、知制誥。〉

と貞元十三年に科擧に及第した事が見えている。

（5）陳詡撰「百丈大智禪師塔銘」（『全唐文』巻四四六）の全文は、以下の通りである。

星躔斗次。山形鷲立。桑門上首曰懐海禪師。室於斯塔於斯。付大法於斯。其門弟子懼陵谷遷貿。日時失紀。託於儒者。銘以表之。西方教行于中國。以彼之六度。視我之五常。遏惡遷善。殊途同轍。唯禪那一宗。度越生死。大智慧者方得之。自經雞足達于曹溪。紀牒詳矣。曹溪傳衡嶽觀音臺懐讓和上。觀音傳江西道一和上。<闕二字>詔諡爲大寂禪師。大寂傳大師。中土相承。凡九代矣。大師太原王氏。福州長樂縣人。遠祖以永嘉喪亂。徙于閩隅。大師以大事因緣。生於像季。託孕而薫擅自去。將誕而神異聿來。成童而靈聖表識。非夫宿植德本。曷以臻此。落髮於西山慧照和尚。進具於衡山法朝律師。既而歎曰。將滌妄源。必遊法海。豈惟心證。亦假言詮。遂詣廬江。閱浮槎經藏。不窺庭宇者積年。既師大寂。盡得心印。言簡理精。貌和神峻。睹即生敬。居常自卑。善不近名。故先師碑文。獨晦其稱號。行同於衆。故門人力役。必等其艱勞。怨親兩忘。故棄遺舊里。賢愚一貫。故普授來學。常以三身無住。萬行皆空。邪正竝捐。源流齊泯。用此教旨。作人表式。前佛所説。斯爲頓門。大寂之徒。多諸龍象。或名聞萬乘。入依京輦。或化洽一方。各安郡國。唯大師好躭幽隱。棲止雲松。遺名而德稱益高。獨往而學徒彌盛。其有徧探講肆。歴抵禪關。滯著未祛。空有猶閡。靡不緘藏萬里。取決一言。疑網雲張。智刃冰斷。由是齊魯燕代。荊呉閩蜀。望影星奔。聆聲颷至。當其饑渴。快得安隱。超然懸解。時有其人。大師初居石門。依大寂之塔。次補師位。重宣上法。後以衆所歸集。意在遐深。百丈山碣立一隅。人烟四絶。將欲卜築。必俟檀那。伊補塞游暢甘貞。請施家山。願爲鄉導。庵廬環遶。供施芿積。衆又踰於石門。然以地靈境遠。頗有終焉之志。元和九年正月十七日。證滅於禪床。報齡六十六。僧臘四十七。以其年四月廿二日。奉全身窆于西峰。據婆娑論文。用淨行婆羅門葬法。遵遺旨也。先時白光去室。金錫鳴空。靈溪方春而涸流。杉燎竟夕以通照。妙德潛感。于何不有。門人法正等。嘗所稟奉。皆得調柔。遞相發揮。不墜付屬。他年紹續。自當流布。門人談敍。永懐師恩。光崇塔宇。封土累石。力竭心瘁。門人神行梵雲。結集微言。纂成語本。凡今學者。不踐門閾。奉以爲師法焉。初閩越靈藹律師。一川教宗。三學歸仰。嘗以佛性有無嚮風發問。大師寓書以釋之。今與語本。竝流于後學。詡從事于江西府。備嘗大師之法味。故不讓衆多之託。其文曰。

梵雄設教。有權有實。未得頓門。皆爲暗室。祖師戾止。方傳祕密。如彼重昏。忽懸白日。其一。
唯此大士。宏紹正宗。雖修妙行。不住眞空。無假方便。豈俟磨礱。恬然返本。萬境圓通。其二。
百千人衆。盡袪病熱。彼皆有得。我實無説。心本不生。形同示滅。此土灰燼。他方水月。其三。
法傳人代。塔閉山原。杉松日暗。寺塔猶存。藹藹學徒。無非及門。唯能覺照。是報師恩。其四。
元和十三年十月三日建。

（6）『大清一統志』巻三〇八「南昌府」「山川」に「石門山　在靖安縣北四十里、渤潭之右。縣志、上有寶蓮峯、即馬祖道一卓錫之地、峯側有宴坐巖。」とある。

（7）なお、慧洪には百丈の肖像につけた眞讃も殘されている。『石門文字禪』巻十八「百丈大智禪師眞贊并序」に次のように見える。

馬祖大寂禪師已化。塔于海昏之石門。師廬其旁既久。衲子相尋日增。於(於)是厭山之淺。乃沿馮水而上。至車輪峯之下。與希運惟政。火種刀耕而食。遂成法席。余崇寧四年春。至山中獲瞻遺像。雖冰枯雪老。若不勝衣。而神氣峻邁。如未度世。謹拜手稽首。爲之贊曰。以實問答。空可青黄。以意求道。神落陰陽。陰陽不測。脱略陰界。青黄摸畫。果因不昧。我有大機。佛無密語。如師子王。露地方踞。稱性文字。隨分叢林。如以妙指。發和雅音。同世之波。壽九十二。護持心宗。謚曰大智。

（8）柳田聖山　「語録の歴史」　『東方學報』京都　五十七册　一九八五

（9）『祖堂集』巻十四「百丈和尚章」に、「自餘化縁終始、備陳實録」とある事から、百丈には恐らく傳記的事實を記した書と思われる『實録』も備わっていたと思われる。

（10）『舊唐書』巻十五「憲宗紀」「元和七年十一月甲申、以同州刺史裴堪爲江西觀察使」。『白居易文集』巻十七「律詩」「江西裴常侍以優禮見待又蒙贈詩輒敍鄙誠用伸感謝」。『舊唐書』の記事により、裴堪が江西觀察使に就任したのは元和七年十一月と確定できる。また、白居易の詩は元和十三年（八一八）作なので、この時にまだ裴堪が江西觀察使の任にあった事が確認できる。從って、百丈が死去した時の江西觀察使は、裴堪であったといえる。

（11）ここで名前の見えている「釋懷和」であるが、「懷和」なる僧侶は史籍には見えない。或いは、「釋懷（海）和（尚）」とあったものが脱落したのであろうか。

（12）説明に關しては、主に　柳田聖山　「禪籍解題」　世界古典文學全集　三六B『禪家語録　二』筑摩書房　を參照した。

（13）以下に述べるテキストを使用して、筆者は『百丈廣録』の異同を調査した。その結果については、稿をあらためて述べる予定である。

（14）『傳燈録』巻二十五「洪州百丈山大智院道常禪師」　淳化二年（九九一）沒。この道常禪師は、法眼文益の弟子に當たるが、慧洪の言う常禪師とはこの道常禪師を指すと思われる。

（15）『石門文字禪』巻二十五「題百丈常禪師所編大智廣録」の全文は、以下の通りである。

余常識老僧知瓊於司命山下。瓊、湓城人。黄龍無恙時客也。爲余言黄龍住山。作止甚詳。嘗手校此録於積翠。謂門弟子曰。佛語心宗法門。趣至江西爲大備。大智精妙穎悟之力。能到其所安。此中雖無地可以棲言語。然要不可以終去語言也。故其廣演之語。大剔禪者法執。而今之五家宗趣。皆此録森列如井之在海。其清涼甘滑。泄苦濁毒所不同。而本則無異質也。予誌其言久之。偶見洞山藏角破函。中多故經。往掀攪之。乃獲見常禪師居百丈。日重編者。熟讀驗瓊之言信然。校世所傳多訛略。因藏之以正諸傳之失。又誌瓊之首告也。

（16）時代が下がるためここに引用する事は控えたが、明の錢謙益（一五八二～一六六四）撰による『首楞嚴經疏解蒙鈔』や、同じく明の曾鳳儀（萬曆十一（一五八八）年進士）撰の『首楞伽經宗通』『金剛經宗通』には、「廣録云」「百丈曰」「百丈云」と言う形で、大量の『百丈廣録』が引用されている。

本稿は平成十八年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「唐宋心性思想に関わるデータベース構築の試み」による研究成果の一部である。